

スイートルームイベント

鳶子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

すばろんスイートルームイベントのまとめです。選ばれるキャラクターは毎回ランダムになっています。不定期更新ですが気長に付き合っていたら幸いです！

目次

スイートルームイベント：笑至贄編	1
スイートルームイベント：片原桃編	4
スイートルームイベント：芥原芥生編	7
スイートルームイベント：陰崎ひめか編	11
スイートルームイベント：妄崎しなぐ編	15
スイートルームイベント：佐島俊雄編	19
スイートルームイベント：揚羽凰玄編	23
スイートルームイベント：野々熊ひろ編	26
スイートルームイベント：根焼夢乃編	30
スイートルームイベント：荒川幸編	34
スイートルームイベント：月詠澄輝編	38
スイートルームイベント：照翠法典編 上	42
スイートルームイベント：照翠法典編 下	47
スイートルームイベント：掃気喪恋編	51
スイートルームイベント：ステイヴン・J・ハリス編	55
スイートルームイベント：切ヶ谷小町編	59

スイートルームイベント：笑至贄編

♡ ♡ ♡

扉を開けるとそこにいたのは：笑至くんだった。この部屋では、他のみんなは僕を相手に妄想をし始めるんだよね…。笑至くんは、僕を相手にどんな妄想をしているんだろう…？

「……………」

笑至くんはベッドの横に立ち、真面目な顔でこちらを見ている。手には何かの書類を持っているみたいだ。

「……お疲れ様です、宗形さん。今日解決した事件の報告書を届けに参りました」

「報告書…？」

一体何の事件なんだろう。それに今、宗形さんって言ったよね…。

「はい。こちらに」

笑至くんは僕に近づき、手に持っていた書類をこっちに渡してきた。受け取った瞬間ずっしりと重たさを感じて、思わずよろめいてしまいそうになる。

「大丈夫ですか？…今回の件に関しては付箋が貼ってあるページからです。どうぞご確認を」

「う、うん」

誘導されるがままに、2人でベッドの端に座る。言われた通り付箋のついたページを開くと、そこにはドラマで見るとような遺体の写真や凶器なんかの写真で貼られていた。

事件の顛末や犯人を特定する決定的な証拠なんかが、フォントのよきな文字でわかりやすく整理されている。おそらく笑至くんの字なんだろう…すごく綺麗だ。

「…えっと、この事件を僕達が解決した…ってことでいいんだよね？」
「そうです。今回も宗形さんは惚れ惚れするような推理を披露されていて、感服致しました」

「あ、ありがとうございます…」

とりあえず頭を下げる。どうやら僕が探偵で、笑至くんが助手…っ

てことみたいだ。笑至くんがいつもより更に丁寧な口調で、なんだかやりづらい…！

「宗形さん、確認は終わりましたでしょうか」

「ああ、うん。まとめてくれてありがとう」

「いえ、それもこちらの職務の内ですので。それでは、本日の業務は終了です」

笑至くんは僕の手からそつと書類を取り上げると、すつと頭を下げる。そして、にこりと笑った。

「お疲れ様でした、宗形くん」

「……？お疲れ、様…」

「今回の事件は苦勞しましたね…何せ、宗形くんが集めてきた証拠が……」

宗形くん、に呼び方が戻ってる。もしかして、仕事が終わったから切り替えたんだろうか？仕事とそれ以外で公私の区別をはつきりさせてるのは、なんだか笑至くんらしいと言えばそうなのかもしれない…。

「…聞いてますか？」

「えっ、ごめん！な、何の話だっけ……」

「まあ…雑談なのでいいですよ。お疲れでしょうし気にしないでください」

笑至くんは態度には出さないけど、申し訳ないことをしちやっただな…。心の中でそつと謝る。

「…それにしても、貴方の成長には本当に目を見張るものがありますよ。短期間でこれだけの事件を解決するまでになるとは…探偵として貴方をスカウトしたボクの目に、狂いはなかったのかもしれない」

「…それは、笑至くんのサポートがあつたからこそだよ」

これは僕の本心だ。笑至くんがいなかったら、僕は真実を突き止めることなんて、とつくの昔に諦めてしまっていただろう。

「笑至くんがいつも隣でいろんなことを教えてくれて、励ましてくれるから、僕は頑張れるんだよ」

「……ありがとうございます」

笑至くんは嬉しそうに微笑む。その笑顔を見て、ふと思いついた。「…そうだ、笑至くんは、何か僕にして欲しいこととかないの？いつも君にいろいろしてもらってばかりだからさ、僕も何か恩返しみたいなことが出来ればいいなって…」

「恩を売っているつもりはありませんが、そうですね…」

笑至くんはしばらく考える仕草をしてから僕の方を向いた。

「…ボクの、頭を撫でてもらえませんか？」

「頭？」

思わず素っ頓狂な声を出してしまう。本当にそんな事でいいんだろうか…？

よく分からないまま、おそろおそろ手を伸ばす。頭をそつと撫でたり優しくぽんぽんと叩いたりしていると、笑至くんが動かなくなった。

「笑至くん…う？」

…よく見ると、耳が真っ赤だ。

「…ボクは、ジョークのつもりで言ったんですけど…」

「え!?ご、ごめん!!本気で言ってるんだと…」

「いいです。もういいです。分かりにくい冗談を言ったボクのミスです。今日はもう帰ります。お疲れ様でした。」

笑至くんはすくつとベッドから立つと、口元を手で押さえ、真っ赤な顔のままつかつかと早足で部屋を出て行ってしまった。部屋にはぼかんとした顔の僕が取り残される。

…これでよかった、のかな？

スイートルームイベント：片原桃編

♡♡♡

僕は緊張で手が震えるのを感じながら、ゆっくりと鍵をさし、ドアノブを捻った。

ピンク色とハートのモチーフが大部分を占める部屋だ。中央には大きなベッドがあり、YES NOと書かれたクッションが置いてある。言っちゃ悪いけど本当にラブホテルみたいだな…。

そして、ベッドの上にちよこんと座っていたのは…：片原さんだった。

この部屋では、他のみんなは僕を相手に妄想をし始めるんだよな…。片原さんは、僕を相手にどんな妄想をしているんだろう…？

「こむぎー」

「えっ!？」

「早く、こー隣に座ってほしいっす」

いきなり片原さんに名前と呼ばれてびっくりしてしまった…慎重にベッドの上に乗る、隣に座る。

彼女の中で僕はどんな設定になっているのか、早く理解しないとな…。

「えつと…片原さん」

「どうしたんすか?いつも通り、桃でいいのに」

「…!?!も、桃…?今日は2人きりで呼び出して、どうしたの…?」

こ、これでいいのかな…?相手の機嫌を損ねると、機嫌を損ねた相手は悪夢を見てしまうらしいから気をつけないとな…。

「実は親友のこむぎにだけ、相談したいことがあって…」

片原さんはそう言ってまっすぐに僕を見つめる。

どうやら僕は彼女の親友ということになっているらしい。いつもの底抜けに明るい笑顔とは少し違う、真剣な眼差しだ。

「僕でいいなら、相談に乗るよ。どうしたの?」

「…桃は”超高校級の解体者”だから、今までずっと家畜を解体してきて、それが当たり前だと思ってた」

「…うん」

「でもだんだん、それが普通じゃないってわかってきて、桃は普通の人よりたくさんの生き物の命を奪ってるんだって…大きくなっていろんな人と会ってから気づいた」

片原さんの実家は屠畜場らしいから、彼女も家業を手伝ってきたんだろう…。確かに、それは僕には考えられない世界だ。

「それで、本当にいいのかなって…。当たり前のように家畜を解体してきたけど、桃たちだって同じ命を持つてる。なのに桃はこうやって、家畜たちの命を奪ってるっす」

「……………」

「それに、時々不安になるんす」

「…不安？」

「あの家畜たちみたいに、自分や他の人が突然ふって消えちゃうんじゃないかって…自分がちゃんと生きてるかわからなくて…怖い」

普段たくさんの命を奪っている片原さんだけが知っている、命の重み。彼女はそれに、たった1人で押しつぶされそうになっているんだ…。

「…気づいてあげられなくて、ごめん」

「いいんすよ。こむぎはわからなくて当たり前だよ、普通に暮らしてるんだから」

「……………」

「それで、1つお願いがあるっす」

「お願い？」

「その、桃やこむぎが、ちゃんと生きてるってことを確かめたくて……………」

「僕でよければ、片原さ…桃の、力になるよ」

何か自分にできることなら片原さんのためにしてあげたい、そう心から思っ僕は言った。

「…ありがとう」

片原さんはようやく安心したように笑った。

「それで、僕はどうしたらいいかな」

「…手を、握らせて欲しいっす」

「手…?」

おずおずと手を差し出すと、片原さんは僕の手をぎゅっと握りしめた。

「…あつたかい。こむぎはちゃんと、今生きてるんだね」

「うん。桃の手も、あつたかいよ」

手を握ったまま、片原さんは今度はすんと僕の胸のところに耳を当てた。距離が近くてかあつと顔が熱くなるのを感じる…。

「な、何してるの…?」

「心臓の音を聞ってるっす」

「心臓の、音…」

「どくん、どくんって聞こえる。これも、こむぎが生きてる証っすよね」

「…そうだよ。僕達はちゃんと生きてる。だから、不安になんて思わないで、今の一瞬一瞬を大切に過ごそう」

「…わかったっす」

片原さんは、こくりと頷いた。近づいてわかったけど、こんなに小さな体で、いろいろなものを抱えて生きてるんだ。彼女の背負ってるものを分け合って、これからも一緒に歩いていけたらいいな…。

「これからは、楽しいことだけ考えて、過ごすようにするっす」

「…でも、今晚は、この音をもう少しだけ聞いていい…?」

「…うん。いいよ」

僕達は体を寄せあって、お互いの暖かさを分かち合いながら、ゆっくりと深い眠りに落ちていった…。

スイートルームイベント：芥原芥生編

♡♡♡

扉を開けるとそこにいたのは…芥原さんだった。

この部屋では、他のみんなは僕を相手に妄想をし始めるんだよな…。芥原さんは、僕を相手にどんな妄想をしているんだろう…？

それにしても、なんだか思い詰めたような顔をしている。どうしたんだ…？

「…聞いてるですか!？」

「えっ、ごめん…!？」

見ると、芥原さんが頬をぷくつと膨らませている。僕がその表情の理由を考えてる間に、何かしゃべっていたみたいだ。まずい、早く設定を把握しないと…!

「ここまで来ればさすがに追いかけてこないはずですよ!？」

「えっと…誰が…?どういうこと…?」

「記憶が混乱してしまうのも仕方ないですよ…!」

芥原さんはうんうんと難しそうな顔で頷く。

「くぐはらたちは今悪の組織に追われてるんですから…!」

「悪の組織…!？」

どうやら僕達は、悪の組織に追われている設定らしい。

芥原さんは”超高校級の魔法少女”だから、テレビで見る魔法少女アニメのような展開の妄想なんだろうか…。

「…ここがバレるのも時間の問題です」

芥原さんは真剣な口調で続ける。

「安心してください、宗形さんはくぐはらが守るですから」

そうきつぱりと言い切った表情には、迷いは見えない。でも、僕には疑問があった。彼女は僕の記憶が混濁していると思っっているから、聞いてみても大丈夫だろう…。

「待って!なんで僕達は追われてるの?」

「…それは…」

警戒するように辺りを見回していた芥原さんの動きがぴたりと止

まった。そのまま口をつぐんでしまう。

「……………」

「……………」

「……………くぐはらが、約束を破ったから…です…」

「約束…？」

約束。絞り出すように芥原さんはそう言ったけど、何の話なのか全く掴めない。

芥原さん自身…もしくは魔法少女には、何か破ってはいけない規則のようなものがあつたんだろうか…？

「魔法少女は、本当はこっそり活動しなければなりません。でも、くぐはらは宗形さんと”秘密”を共有してしまいました…」

芥原さんはそう答えた。

「秘密って…もしかして、芥原さんが魔法少女ってこと？」

「はい」

彼女は素直にこくりと頷く。

「自分が魔法少女であることは、他のみんなには内緒にしなければいけないのです。くぐはらは、宗形さんにそれを言ってしまった…だから、くぐはら達は今追いかけてるんです」

「そうだったんだ……………」

でも、そんな重要なことをどうして芥原さんは僕に伝えたんだろう…？

「宗形さんは…くぐはらの、その、特別な存在ですから…大丈夫です、必ずくぐはらが責任を持って守るですよ」

芥原さんのもぞもぞと恥ずかしそうにしながら僕に告げる。

(…特別な存在？それって一体……………)

「…ごめん、全然思い出せないけど、でも、それは芥原さんのせいじゃないよ」

「宗形さん…？」

芥原さんがきよんとした顔でこちらを向く。

「秘密を共有してしまつた以上、僕にだって責任があるはずなんだ。だから、僕も一緒に戦うよ」

「…宗形さん……」

芥原さんはぎゅつとピーちゃんを胸元で握りしめた。

「…やっぱり、宗形さんは変わらないです」

「変わらない…?」

「はい。あの時も、くぐはらを同じように助けてくれました」

「小学校の、ハイキングで…くぐはらは、宗形さんを誘って山の奥に行っちゃって…2人で迷子になっちゃったんです」

「迷子に…」

それが、特別な存在と関係あるのだろうか。

「泣きながらくぐはらのせいだつて謝った時、宗形さんは、君のせいじゃないって言ってくれて…くぐはらの手を引いて、みんながいるところまで連れてつてくれたんです。くぐはらはその時、初めて人に助けてもらいました。だから今度は、くぐはらが誰かを助けたいって思っただんです」

「それが、くぐはらが魔法少女になった理由です…宗形さんがいなければ、今のくぐはらはいません…宗形さんは、特別なんです」

「芥原さん…」

これはきつと彼女の妄想の中の設定なんだろうけど、実際の彼女にも、こんなきつかけがあったんだろうか。

常に誰かを助ける、魔法少女になったきつかけ…今度ゆつくり話せる時に、聞いてみたいな。とりあえず、今は焦っている彼女に落ち着いてもらうことを考えよう。

「僕達、追われてるんだよね?ここは安全そうだから休めるうちに休んでおこう」

「はい…宗形さん、えつと……」

「な、何?」

「…あの時みたいに、手を握っててもいいでしょうか……」

「…いいよ」

僕達はベッドの縁に手を握って座った。

しばらく話していると、緊張していたくぐはらさんも落ち着いてきて…いつの間にか、僕の肩を借りてやすやすと眠りに落ちていた。起

こさないように体をそつと抱え、ベッドに寝かせて上からふかふかの布団をかける。

いつも忙しそうに動き回っている彼女は、夢の中でも悪の組織と戦いを繰り広げているんだろうか。せめて今日はゆっくり、いい夢を見てほしいな。

「…おやすみなさい、芥原さん」

スイートルームイベント：陰崎ひめか編

♡♡♡

扉を開けるとそこにいたのは…陰崎さんだった。

この部屋では、他のみんなは僕を相手に妄想をし始めるんだよな…。陰崎さんは、僕を相手にどんな妄想をしているんだろう…？

「あ、こむぎくん…」

陰崎さんは僕の姿を見ると、嬉しそうに声をかけてきた。…僕も名前前で呼んだ方がいいんだろうか？

「ひ、ひめかさん…今日はどうしたの？」

「な、名前呼びはやめてって言ったじゃん…。」

陰崎さんは顔を引きつらせる。まずい、やっぱりだめだったのか…？

「ひめかって男の人に呼ばれると、なんかこうオタサーの姫みたいで恥ずかしいんだよ…べ、別に、い、嫌な訳じゃないんだけど。む、むしろちよつと嬉しくなつちやつたりしたんだけど…あ、いや、今はナシ！いつも通り陰崎って呼び捨てでいいから…名前呼び方変えるのは、告白シーンとかそういう山場だけをお願いしたいかなって…。」

「い、陰崎だよね…わかった…。」

ものすごい勢いでまくし立てられてしまった。でも、嫌ではないんだ…女の子って難しいなあ。

「それよりほら、そこに立って！」

陰崎さんは気を取り直したように、目の前の壁を指さす。…僕がデッサンのモデルをするってことかな？そこに行つて立つと予想通り、彼女によるポーズングの指定が始まった。

「こむぎくん何気に背高いからさ、ジョジョ立ちとかやらせてみたかったんだよね。ひめかはまだ未履修なだけだし、やっぱりあの絵柄には憧れちゃうよ…こむぎくん、できる？」

「え、えつと…こんな感じ？」

「あつそうそう！近い近い！」

うろ覚えのポーズを試してみると、陰崎さんが嬉しそうに声を上げる。

「うん、足はそのまま、もうちょっと胸張って、腕も若干上にあげて…あ、高さはそのまま角度だけつけられる?…」

僕は陰崎さんの細かい指示に従って身体を動かす。これ、見る方はかつこいいんだろけど、結構きつい姿勢だな…。

「そうそれ、完璧!よしっ、そのまましばらく止まって!絶対動かないでね!!」

陰崎さんはそう言ってガリガリとスケッチブックに鉛筆を走らせ始めた。凄まじい速さで紙の上を鉛筆が駆け回る。

しばらく時間が経って、この体勢のままているのがかなり辛くなってきた。

「あ、あの…そろそろ…」

「う〜んいいなあ、この曲線…:やつぱり本家みたいに、ゴゴゴゴって音も書いた方がかつこいいよね…:いつもと絵柄変えるの楽しい:いやもしかなくてもこれは天才…:」

僕の声が聞こえていないのか、陰崎さんはぶつぶつと呟きながら作業を続けている。まずいぞ、これ…:僕がポーズを保つのと陰崎さんが描き終えるの、どっちが先か…:。

「できたーっ!」

「痛っ!!?」

陰崎さんがスケッチブックを掲げて高らかに叫んだのと、僕がつた足を押さえてしやがみこんだのはほぼ同時の出来事だった。

「こ、こむぎくん!?大丈夫!」

彼女は手にしていたスケッチブックを放り出して、慌ててこちらに近づいてくる。

「大丈夫…:ちよ、ちよつと足つつちやって…」

「どうしよう…:…と、とりあえずベッドに座ろ、肩貸すから掴まって」
言われるがまま、陰崎さんの肩を借りてベッドまで移動する。2人でベッドの上にぼすんと腰掛けて、一息つく。

「ごめんね、ひめか友達いないから、こんなこと頼めるのこむぎくんぐらしいかいなくて……」

「ううん、気にしないでよ。今のは僕がポーズを取り慣れてなかったからだし」

僕がそう言うのと、陰崎さんは安心したようにほつと息を吐く。

「…さつきちよつと手見てて思ったんだけど、こむぎくんの手ってゴツゴツしてて男の子っぽい感じだよね」

「元から手は大きい方だし、お花を植えるために土を耕したりとかもするからかも。顔と全然合っていないってよく言われるよ」

「なるほどく……でも、ひめかは好きだよ」

「…へ？」

「こむぎくんの手！凹凸あった方がデッサンしがいがあつていいんだよね」

「あ、ありがとう……」

びつくりした、手のことか……。

陰崎さんとあんまり落ち着いて話したことはなかったけど、こんなに明るい顔をするんだ。本人は自分のことをよく卑下してるけど、僕は普通に素敵な人だと思うけどな……。

「それじゃ、足も治ったみたいだし、時間もつたいないからもう一枚いってみようか！」

しばらく他愛もない話をした後、彼女は元気よく言った。

「もう一枚…!？」

「だ、だめ……？」

陰崎さんが少ししゅんとした様子で聞いてくる。

「う、ううん。全然いいよ。陰崎さ…陰崎の力に少しでもなりたいし」
そう言いながら、僕はまた立ち上がって、さつきスケッチブックで見せられたポーズを取る。

「まさかこんなお願いごと聞いてくれるとは思わなかったからさ…へへ……あ、そこ手動かしちゃダメだよ。ミリでも動いたら構図変わっちゃうからね。」

「は、はい……」

真顔で注意された……。僕は全身を動かさないよう気をつけながら、心から楽しそうにデッサンをする陰崎さんを眺める。

確かにしんどいけど、たまには体に刺激を与えないとだめだろう。今度陰崎さんも誘って、切ヶ谷さん達のトレーニングに混ぜてもらおうかな……。

「そっ……動くな！」

「ごめんなさい！」

どうやら、明日は筋肉痛になりそうだ……。

スイートルームイベント…妄崎しなぐ編

♡♡♡

扉を開けるとそこにいたのは…妄崎さんだった。

この部屋では、他のみんなは僕を相手に妄想をし始めるんだよね…。妄崎さんは、僕を相手にどんな妄想をしているんだろう…？

「やつほく、びっくりした？お姉さん退屈だったから遊びに来ちゃった♡」

「……………」

この部屋で妄崎さんがそんなことを言うと、なんとなく怪しい響きができるな…。

「ほらほら、早くこっち来なよ」

妄崎さんはベッドの上から僕の腕をぎゅっと引っ張る。

「ちよ、ちよつと妄崎さん、困るよ……………」

「えく、自分だつて妄崎でしょ？なんで苗字呼びしてるの？」

「え……………」

「そんなあー！こむぎくんはこんなに可愛いお姉ちゃんのこと、忘れちゃったの…!?!」

妄崎さんがわざとらしく目を潤ませて、僕の手を両手で包み込むようにする。

「……………冗談とかじゃなく？」

「冗談言ってるのはそつちだよく、いい加減つままないからやめてよね。昔みたいにお姉ちゃんく！ってかわいく呼んでみてよ」

「ええ…!?!?、ぐめん……………」

どうやら、本当に妄崎さんがお姉さん、という設定らしい。怪しい仲じゃなくてよかった…。そつと胸を撫で下ろす。

「お、お姉ちゃん。今日は僕に何の用？」

「ういふ……………」

妄崎さんはお姉ちゃんと呼ばれたのが嬉しいのか、にこにことしている。

「こむぎくんが反抗期で最近全然話してくれなかったからさ、寂しいお姉さんはわざわざこうして出向いてあげてるって訳。ほら、たまには2人で昔話でもどう?」

「あはは……うん、いいよ」

妄崎さんの中の僕は反抗期って設定なのか……とりあえず場を繕おうと愛想笑いをする。

妄崎さんと僕が姉弟……どんな子供時代を過したんだろう? 少し興味があるな。

「昔はよく2人で公園で遊んでたよね。世界で一番大きい砂のお城を作ろう!なんて言っけ。結局こむぎくんが自分で崩して泣いちゃって、私がおんぶして帰ったんだっけ」

「う、……そんなことあったかな……」

「……こら、事実を都合のいいように改変しちゃダメだよ?」

妄崎さんは悪戯っ子っぽく微笑んだ。……いや、今のは、弟をイジるお姉さんみたいな笑顔だ。

「……こむぎくん、今園芸部でお花育ててるんでしょ? この前植木鉢持ってるの見たよ。何育ててるの?」

「ああ、あの子ははなちゃんって言っけ。僕が見つけたんだけど、新種のお花かもしれないんだよ!」

「へえ、すごいじゃない! 昔からお花好きだったもんね、自分の好きなことをこの歳まで続けられるって、とってもいいことだと思うな」

「そんなにたいそれたものじゃないけど……ありがとう」

「こむぎくんってば、相変わらずシャイで奥手なんだから! もっと自信持ちなよ……あ、そうだ」

妄崎さんはふと思いついたように、膝を折り畳んで正座の姿勢になって、僕に向き直る。

「……膝枕、する?」

「へっ!」

唐突すぎないか!? なんてこの状況で膝枕なんだ……!?

「い、いいよ。別に子供じゃないんだし……」

「なによく昔は好きだったくせに！もう、意識しちやってるの？いいからいいから！」

そう言われて強引に膝の上に頭を乗せられる。柔らかくて、あったかい。真上にあるにやにやとした顔と目が合って、頬がどんどん熱くなつていくのがわかる…。僕は急いで顔を背けた。

「ふふ、懐かしいね…」

妄崎さんはそんな僕の頭をゆっくりと、優しい手つきで撫で始める。

「…ねえ、こむぎくんは今、幸せなのかな？」

「……………」

彼女の頭を撫でる手は止まらない。

「…僕は、幸せだよ。お姉ちゃんもいるし、園芸っていう自分の好きなことができ、たくさんの素敵な仲間とも出会えた。こうやって何気なく過ごしてる今も、すごく貴重で、大切なものだって思う。」

「……………そっか」

「お姉ちゃんは？今、幸せ？」

そう聞いた瞬間、手がぴたりと止まった。

「……………」

起き上がって妄崎さんの方を向くと、じっと下を見て黙り込んでいく。唇が少し、震えているのがわかった。

「…そうね……私は、幸せなのかな……」

独りごちるように、彼女は僕に向かって言う。

「……私にも、わかんないや」

そして、ひどく切なそうな、悲しそうな笑みを浮かべた。

「……………」

「…もう夜も遅いね。ごめんね、長居しちやって。明日も学校あるし、早く寝よう」

妄崎さんは、無理やりな作り笑いでそう言うと、静かに部屋を後に

した…。

僕は”また”彼女を救えなかったのかもしれない。そんな言葉が、なぜか頭によぎった。

スイートルームイベント：佐島俊雄編

♡♡♡

扉を開けるとそこにいたのは…佐島くんだった。

この部屋では、他のみんなは僕を相手に妄想をし始めるんだよね…。佐島くんは、僕を相手にどんな妄想をしているんだろう…？

「……………」
佐島くんはじつと僕を見つめていた。心なしか、いつもより冷たい目に思える。

「……………」

お互い沈黙が続く。ど、どうしたらいいんだ…？
しばらくすると、佐島くんがゆっくりと口を開いた。

「お父様…いや、宗形さん。僕、この家を出ようと思うんです」
「……………へ？」

お父様…？家を出る？言われたこともないような言葉が頭をぐるぐると回る。

「さ、佐島くん、とりあえず一旦落ち着いて……」

「…はは、佐島くんだなんて。貴方はいつだってそうだ。僕のことを自分の作品の、装飾品程度にしか思っていないんでしょう？」
「……………ええつと……」

……僕が佐島くんの言うお父様で、佐島くんは僕の家を出ようとしているってことでいいのかな…。

まごまごしていると、彼は呆れたようにため息をついた。
「ここまで言っても分かりませんか？僕はもう一人でやっていける。貴方の手助けなんかなくても、この才能を使って生きていけるんだ。

邪魔しないでくださいよ。」

淡々とした言葉に気圧される。でも、高校生が家を出て親御さんの援助もなしに一人暮らしって、結構危ないんじゃないのか…？

「いきなり一人暮らしをするのは危ないと思う、よ…君の身に何か

あつたらいけないし、やっぱりそういうのは高校を出てからの方がいいんじゃない……」

たどたどしい僕の言葉を、佐島くんは鼻で笑う。

「今更そんなことを言い出すんですか？笑えますね、そう言えば貴方に従順で可愛い『佐島俊雄』に戻ると、願っているんでしょう？」

「佐島く……」

「そんな訳が無いじゃないか。だってこれが本来の僕なんだ。愛想を振り撒いて可愛い自分を演出して、媚びを売るような甘ったるいチョコレートを作る……そう教えたのは他でもない貴方だ」

佐島くんは溢れ出すような感情を吐露しながら、拳をきつく握り締めている。伏し目がちなまま、僕から視線を逸らす。

「…っ、本当は、辛かったんだ。感情のない人形のように上っ面だけ甘い言葉を吐いて、また甘い仮面を重ねて。僕の意味はどうなるの？…本当の僕は、要らないの？」

消え入りそうな声でそう言うと、彼はきつと僕を睨みつけた。

「僕は貴方のお人形じゃない。一人でいるのは寂しいし、嫉妬だつてする。家に監禁同然でチョコレートを作らされ続けるのも、もう嫌なんだ。」

力強い口調で言い切ると、つかつかと僕の前に歩み寄ってくる。僕は魔法にでもかけられたかのように、その場から一步も動くことができない。そのまま彼は目の前まで来ると、力なく僕にしがみつく。

「お願い、お願いだよ。パパ。ここから出して……」

「僕を……自由に……」

悲痛な叫びと共に、彼の目から涙がぼろぼろと零れ落ちた。ほっそりとした体軀は小刻みに震えている。今彼の手を振り払ったら、きつといとも簡単に倒れてしまうんだろう。

「佐島くん……」

まるで、怯えている小動物みたいだ。いや、父親に監禁まがいのことなんてされたら、誰だってそうなってしまっただろう……。佐島くんだって、普通の男子高校生なんだ。

僕は気持ちを落ち着けさせるために、彼の頭を撫でようと手を伸ばす。

その瞬間。

「……っ!?!」

涙は、嘘のように消えていた。代わりに顔を覆うのは薄い笑み。

「……くく、はあ、やっぱり面白いね。宗形さんは。」

「え……う？」

突然の状況に、動揺が隠せない。どういうことだ? だって、彼はさっきまであんなに……。

「同情してちよつと可哀想になっちゃった? 自分より小さな男の子に、庇護欲でも湧いちやったのかなあ……宗形さんって草食系に見えて、案外そういうのが好きな変態だったんだね」

「な、……」

今の佐島くんからは、先程までの雰囲気を感じさせない。むしろ、僕を嘲笑うかのように、冷たい笑みを浮かべている。

「ああ、さっきのは全部嘘だよ。君がそういう趣味を持っているのかなあと思っつて。いつも僕のチョコレートを食べてくれるお札に、出血大サービス、つてやつさ」

「…それにしても、迫真の演技だったね?」

僕は遠慮がちに確かめる。顔が強ばっているのが、自分でもわかる。

「僕の見た目上、こういうのが好きなお客様も多いからね。君だって普段の僕なんかよりこういう男の子の方が守ってあげたくなるでしょ?」

彼は飄々とした態度で言う。その、自分のことを全く大切に思っていないような口振りに、胸がちくりと痛んだ。

「…そんなことないよ。僕は作り物なんかじゃない、本物の佐島くんのことをもつと知りたい。本当の君が何を思ってるのか、どんなこと

を考えてるのか、ちゃんと理解したいんだ……」

「ふうん…なるほど、宗形さんは冷たくされたり苛められたりする方が好みなんだね。覚えておくよ。」

「……………」

どうしてこんなにも僕の気持ち伝わらないんだ……。それとも、わかった上で見ないフリをしているのか。

散々酷い目に遭っている気がするのに、その度にどんどん佐島くんのことを知りたくなってしまふ。彼の本心は中身の入ったチョコレートみたいに分厚くコーティングされていて、まだ何もわからないけど…。

「じゃあね。そろそろ冷ましていたチョコレートがいい具合だろうし、僕は先にお暇させてもらうよ。」

「えっ、ちょっと…!?!」

そう言うと佐島くんは、何事もなかったかのように、颯爽とドアの向こうへと消えていった。

「な、なんだったんだ……」

緊張が解けると共にどつと疲れが来て、ベッドに倒れ込む。そのまままゆつくりと、意識が遠のいていった…。

スイートルームイベント：揚羽凰玄編

♡ ♡ ♡

扉を開けるとそこにいたのは…揚羽くんだった。

この部屋では、他のみんなは僕を相手に妄想をし始めるんだよな…。揚羽くんは、僕を相手にどんな妄想をしているんだろう？

…揚羽くんの妄想って、なんだか少し怖いな…。

「……………」

「……………」

「こむぎ、やっと2人になれたワね。忙しくてなかなか時間を作れなくてゴメンなさいね…。」

しばらくの沈黙の後、揚羽くんが申し訳なさそうに言う。

「え…あ、別に、大丈夫だよ」

「お仕事が急に一気に入ってしまったってね…あたしと暫く会えなくて、寂しくなかったかしら？」

お仕事…揚羽くんは”超高校級の軍人”だから、僕も同じく軍人なのかな。でも確か、揚羽くんって軍の中でも偉い立場って言ってたよな…そんな彼がただの軍人の僕にこんなに優しく接するの…？

「あたしはすぐく寂しかったワ…だから今、こむぎに会えてとても嬉しいの」

「……………」

…もしかして、僕は揚羽くんの恋人、なのか…？

「…こむぎ？ぼーつとしてどうしたのよ、もう部屋に帰りたいのかしら？まあ、そうよね…無理にあたしの部屋に呼んでしまったんだもの…、でもここからは出られないワ」

「え？あ、揚羽くん…？どういうこと？」

「今日は貴方を返したくないの。今日だけでいいのよ、あたしの傍にいてくれないかしら。」

断るのもなんだか申し訳ないし、ここは揚羽くんの妄想の中だ。彼が不機嫌になっちゃったらだめだよな…。

「うん…いっよ」

「ふふっ、ありがと。コレ…付けてもらってもいいかしら」

揚羽くんが妖艶な笑みを浮かべながら差し出しのは……首輪!? そんな物、どこから取り出したんだ…!?

「少し大人しくしてて頂戴ね」

揚羽くんは、焦る僕に構わず、慣れた手つきで僕に首輪を付けようとしてくる。

「ちよ、ちよつと揚羽くん!? どうして首輪なの…?」

僕が尋ねると、彼は不思議そうな顔をする。

「どうしてって…あたしの傍から離れないためよ?」

「そんなことしなくても、僕は逃げたりしないよ…」

「コレが有れば色々できるのよ、こういう事したりね」

そう言う揚羽くんは首輪のリードをぎゅつと引っ張って、僕を抱き締めた。

「…こむぎ、とても似合ってるワ。可愛いわよ…」

ち、近い……。耳元で吐息混じりに囁かれたら、男の僕でもさすがにドキツとしてしまう。こんなに近距離で彼を見ることも、きつと今日ぐらいだろうな…。

香水をつけているのか、とてもいい香りがふわっと鼻に飛び込んできくる。体格のいい揚羽くんを抱きしめられると包み込まれているみたいで、温もりが直に伝わってきた。

「揚羽くん、暖かい…ね。あと、すごくいい香りがするよ」

「ふふっ、そうかしら? ありがと、愛してるワ、こむぎ…」

揚羽くんは嬉しそうに言うと、部屋の中央のベッドを指さす。

「ここですつと立つてるのも疲れちゃうワ、ベッドに行きましょう?」

「良いけど…」

僕は揚羽くんの手元にしか目がいかなかった。

「ど、どうして刀を持つてるの…?」

…嫌な予感しかしない。

「…こむぎにとって赤色ってどんなイメージなのかしら?」

「赤…? 僕は活発なイメージ、みたいなのがあかな…」

赤色の花は、色とりどりのお花の中でもみんなの目をぐつと惹きつける。最近では薄いパステルのお花が人気だけど、僕は赤みたいな、見ると活力がもらえそうな鮮やかな色も好きだなあ…。

「活発…そうね。そうとも取れるワね」

でも、揚羽くんの考えは違った。

「あたしにとつての赤は…」愛、よ」

「愛……」

赤い薔薇なんかは確かに愛の象徴って感じがするよな…？揚羽くんが言いたいのはそういう感じのこと、なのかな…。

そんなことを考えていると、突然、揚羽くんの手が眼前に伸びてくる。その手には刀が握られている…！

「あたしの手で赤に染まった貴方は………」

「揚羽くん!!ちよつと待つてよ!!?な、何する気なの!!?」

「少しだけ……少しだけよ……大丈夫…。あたしも一緒に染まるわ、お願いよ」

じたばたと抵抗しても簡単に捻じ伏せられる。力が強い……どうしよう、このままじゃ……

「わああっ!!……はッ……はあ……はあ………」

次に目が覚めると、僕は自分の部屋のベッドの上にいた。

(…ゆ、夢か………)

全身が嫌な汗でびっしょりだ。脱力感に襲われながらも無理やりベッドから体を起こし、顔をぬぐう。

…手首から微かに、あの香水の香りがしたような気がした。

スイートルームイベント：野々熊ひろ編

♡♡♡

扉を開けるとそこにいたのは：野々熊さんだった。

この部屋では、他のみんなは僕を相手に妄想をし始めるんだよな…。野々熊さんは、僕を相手にどんな妄想をしているんだろう？

ベッドの上で退屈そうに足をばたばたとさせていた野々熊さんは、僕の姿を見るなり、ぱつと目を輝かせてこちらへ走ってきた。

「兄貴ー！」

「兄貴…？」

「…あつ!!兄貴”じゃなくて”兄ちゃん”って呼ぶんだつたな…」

野々熊さんはしまった…：というような顔で、手で口を押さええている。

「後輩達からも”アニキ”って呼ばれてるから嫌なんだつたら？私も兄貴って呼びてえんだけどなあ…そっちの方が絶対かけえじゃん？」

「そ、そうだね…」

後輩達からアニキなんて呼ばれてるお兄さんって、一体どんな人なんだ…：？

「久しぶりに兄ちゃんが起きてる内に帰ってきてくれて嬉しいよ…いつもは深夜にしか帰ってこないし、朝はなかなか起きてこないしなあ…」

「う、うん…」

「あ、ええつと、それが不満とかじゃないんだぜ！兄ちゃんがこの地域のヤンキー達の抗争を無くすために、盗んだバイクで走り回ってるのは知ってるよ。夜遅くなってもしょうがねえって」

「…ごめんね」

僕は、何者にされてるんだろう…。野々熊さんのお兄さん且つ、不良のリーダー…：みたいな感じなのかな…。

「兄ちゃんが謝ることないって。私はみんなから頼られる姉御になるんだ、だから…このぐらいつ、我慢できるんだぞ！寂しくなんかない！」

野々熊さんはぶんぶんと首を横に振り、気を取り直したように僕に尋ねる。

「そうだ、久々に話せるんだし、私になんか聞きたい事とかないか？」
「そうだなあ…」

野々熊さんに聞きたいことか…きつき言ってたことが少し気になるな。設定が不良なら、口調もちよつと男っぽくして…

「…何で、ひろはみんなから頼られたいんだ？」

「何で？そんなの1つに決まってる！」

野々熊さんはぴん、と人差し指を立ててにかつと笑った。

「私、めちやくちや兄ちゃんに憧れてるんだぜ。カツコよくて面倒見が良くて、みんなに慕われて…私もそんなふうになりてえんだあ…」

「…そうか。ありがとう」

「へへっ！まあ、まだ全然うまくいかないことばっかりなんだけどさあ…。ちっちゃいからって舐められたり、バカにされたり…。うう、私も早く兄ちゃんみたいにデカくなりたいぜ！」

「身長に関してはどうしようもないな…同じ遺伝子なんだし、野々…ひろも、そのうち大きくなるんじゃないか？」

「そっか、そうだよな！」

キラキラと目を輝かせる野々熊さん。彼女が本当に僕の妹だったら、きつと毎日がすごく楽しいんだろうだなと思った…。

「そうそう、小さい頃から兄ちゃんはすげえデカかっただろ？それで、高いところに上がっちゃったボールとか、木の上から降りられなくなつた子猫とかを助けてたりしてて。兄ちゃんはすごいんだぞつて近所のみんなに自慢してたんだ！」

「あはは……」

子猫を助けるのは僕も小さい頃やってたなあ。失敗して木から落ちちゃったけど…。少し苦い子供の頃の思い出が、胸の中で蘇る。

そういえば小学生や中学生の時って、近所の不良っぽい年上の男の人達がすごく怖かったような…。

「…ひろは、兄ちゃんが不良で嫌じゃないのか？」

「…そりゃあ、高校に入ってグレたっているんな人から言われたけど。でも、私の中では兄ちゃんは、ずっと変わらず自慢のかつこいい兄ちゃんだ」

「……………」

「困ってる人がいたらほっとけないとか、ぶっきらぼうだけど優しいとかか、ずうつと昔からだ。周りがなんと言おうと、私は兄ちゃんのこと……大好き、だぜ…」

最後につれて野々熊さんの声が小さくなっていった。顔を背けていたけれど、彼女の思いがはつきりと伝わってきた。

「…ありがとう、ひろ」

「ま、まじめに受け取るなよなあ！照れくさいって！」

反撃なのか、ぽかぽかと拳で叩いてくる。思わず笑ってしまうと、彼女は頬を膨らませた。

「…もう、兄ちゃんなんて知らねえ」

「あはは、ごめんごめん。ほら、何か頼みとかあったら聞くからさ、なんでも言つてよ」

「えっ、いいの؟!じゃあ……」

野々熊さんはやや恥ずかしそうに告げる。

「兄ちゃんに、私の…頭を、撫でてほしい」

「…頭?」

てつきり、一緒にゲームをしたいとかそういうお願いだと思つてたけど……。

「なんだよー甘えたつていいだろお…たしかに私はお姉ちゃんに憧れてるし、みんなの頼れる姉御になりてえ!つて思つてるけど……兄ちゃんの前でぐらい、『妹』の私でいたつていいだろ?」

「……………うん。もちろん」

僕は微笑んで頷く。野々熊さんの頭を、少し強めにわしゃわしゃと撫でた。気持ちよさそうに目を瞑っている…。

「…ありがとな、兄ちゃん。…さ、一緒にゲームしようぜ！」

「こ、これから!?!」

この部屋に来てから、結構時間が経ったと思うけどな……?

「ああ！オトナの夜はまだまだ終わらないんだぜ！」

野々熊さんが隣で寝落ちるまで、一緒に格闘ゲームをした…。

スイートルームイベント：根焼夢乃編

♡♡♡

扉を開けるとそこにいたのは…根焼くんだった。

この部屋では、他のみんなは僕を相手に妄想をし始めるんだよな…。根焼くんは、僕を相手にどんな妄想をしているんだろう？

「遅いよ宗形あ」

根焼くんはベッドの上に寝つ転がっていたけど、部屋の中に入ってきた僕に気づくと体を起こした。

「ぐめんぐめん…」

「…はあ、こんな遅くまでナニしてたの？早くこつち来なよ」

手招きされるがままに、ベッドの上に乗る。ここまでのしやべり方や態度はいつもと変わらないように思えるけど、僕は根焼くんの中でどんな存在なんだろう…？

僕が隣に座ると、根焼くんは僕のセーターの袖をくいつと引つ張った。そして自分のネクタイを慣れた手つきで緩めると、シーツの上を手をついて、上目遣いで見つめてくる。

「もー、待ちくたびれすぎて帰っちゃおうかと思ったよ。…早くやろ」

「………へ？」

…やる？って、何を？

「忘れちゃった？コレだよ、コレ」

そう言うと根焼くんは、右手で作ったOKマークの親指と人差し指の間に、左手の人差し指を差し込んでみせた。

「………んな、!？」

「なーに照れちやってんだよ。好きなクセに」

「そんな訳ないでしょ!?!ぜ、絶対そんなことやらないからね!!」

「…はあ!?!お前、今日ボクが何のために来たと思ってるの!?!」

胸ぐらをぐいつと掴まれる。…いや、いくら夢でもさすがにその一線は超えちゃだめだろう…!

「知らないよそんなの!!とにかく、絶対だめだからね!!」
「……………」

根焼くんをむりやりに遠ざけると、彼はかなりむすっとした顔をした。
た。

「……………ごめん」

「……………」

「どうやら拗ねてしまったみたいだ。なんとか機嫌を治さないと……。でも、どうすればいいんだ…………？」

「…宗形のせいでよれちゃったんだけど。直して」

しばらくすると、根焼くんは不機嫌そうに自分のネクタイを指さした。

「わ、わかった…」

僕はおおずとネクタイに手を伸ばす。自分のネクタイは簡単に結べるけど、人のをやるとなると意外と難しいな…。いつも通りやろうとしても、なんだかあべこべになってしまう。

「…ばーか、へたくそ」

そのネクタイの主は、手間取る僕をにやにやと楽しそうに見つめていた。

「そう思うなら自分でやってよ…」

「やだ。宗形がいい」

「ええ……………」

「あはは、顔赤くなってやんの」

「……………」

な、何なんだ、一体…………。

振り回されているのはわかるけど、ワガママな彼がちよつと可愛く見えてしまうのは気のせいだろうか…。

「…はい、できたよ」

ちよつと形は不細工だけど、なんとか結ぶことができた。

「ありがとう、」

根焼くんがいきなりぐいっと顔を寄せてきたので、思わず仰け反

る。すると彼は残念そうに元のあぐらの姿勢に戻った。

「ちえっ。不意打ちなら上手くいくかと思つたのになあ…」

「…い、今の何?」

「さあ?」自慢の勘で察しなよ、宗形クン」

「……………」

あからさまに僕の頬を狙つてきてたつてことは…き、キス、しようとしてたんだよな……………。今度は言われなくても顔が熱くなつていくのがわかる。

彼は何も言わずに僕をじつと見つめている。次は何をするつもりなんだろう?…?見つめ返しながらも、自然と身構えてしまう。

「……………」

「……………」

なんだかじつと見てると、誘惑されているというか、根焼くんに吸い込まれちゃいそうだ…。

そつと視線を逸らすと、ぐいつと肩を掴まれて向かい合うような格好にさせられる。

「…どう?煽られてその気になった?」

「いや、それはならないけど…」

「ふーん。…でも、ボクのことずつと考えてるでしょ?」

「…!」

悪戯つぼく微笑まれて気づく。…そういえば、この部屋に来てから、根焼くんのことしか考えていない気がする。

彼が何を考えているのか、次は何をしてくるのか。そんなことばかり思案していた。

「…うん」

「宗形つて正直すぎ。そのまま大人になったら、悪い奴にすぐ騙されて搾り取られちゃうだろうなあ…」

「あはは、そうかもね……………」

「ほんつとダメダメだよ、お前。今日も全然空気読めないし?女のこだったら一発でフラれてるよ」

「うっ……………」

根焼くんに比べたら、確かに勉強やら運動やら、全てが劣ってるんだろう。でも、だったらどうして…

「…じゃあ、根焼くんは、どうしてそんなダメダメな僕がいいの？」
「……………」

根焼くんは答えずに、また僕の方に近づいてくる。反射的にぎゅつと目を瞑ると、僕の予想とは裏腹に、包み込むような、程よい強さで抱きしめられた。

体の緊張を解すように、丁寧な手つきで髪を梳かれた後、ゆっくりと耳元で囁かれる。

「ボクは不完全な君が好きなの。頭が君でいっぱいになっちゃうぐらい。」

「……………」

…今のは、キュンと来ない人の方がおかしいだろう……。

「…チキンな宗形のために、今日は一緒に寝てあげるだけにしてやるよ」

「…？一緒に寝るって…」

「隣で寝るだけ。何？本番がいいならそうするけど？」

「え、遠慮しときます……」

根焼くんの隣で、抱き枕にされながら眠りについた…。

スイートルームイベント：荒川幸編

♡♡♡

扉を開けるとそこにいたのは…荒川さんだった。

この部屋では、他のみんなは僕を相手に妄想をし始めるんだよね…。荒川さんは、僕を相手にどんな妄想をしているんだろう？

「あ、先輩…！」

僕が部屋の中に入って扉を閉めると、荒川さんはほっとしたような表情で声をかけてきた。

「先輩…？」

「は、はい…それがどうかしましたか？」

「ううん、なんでもない…！大丈夫だよ」

不安そうな顔をしたので慌てて否定する。僕は彼女の先輩っていう設定みたいだな…。

「あ、あのっ、今日は突然お呼び出したのに来てくれて、ありがとうございます
ございました」

荒川さんはまずぺこりと僕に頭を下げた。僕は首を横に振る。

「気にしないでよ。えっと、僕に何か用事があったのかな？」

「は、はい。その、ずっと前から言おうと思ってたんですけど、何となく、機会を逃しちゃって…。」

荒川さんは僕から視線を逸らす。なんだか緊張しているみたいだけど、一体、何の話なんだろう…？

話しやすいように、2人でベッドの縁に腰掛ける。少しすると、彼女は遠慮がちに口を開いた。

「…今日は、お礼を言いたくて来てもらったんです」

「お礼？」

「はい。先輩も、私の噂は知ってますよね…？学校の中で有名ですか…。」

「噂…って何だっけ…。」

「あっ、気を遣ってもらわなくても大丈夫です。自分でも悪い意味で

名前が知れてるのは分かってますから……」

荒川さんは寂しそうに笑う。あんまり目立ってるようなイメージは湧かないけどな……それに、悪い意味って……

「……小さい頃から、私の周りでは事故がたくさん起こって……車に乗ったら玉突き事故が起こったり、旅行で船に乗ったらその船が難破したり……」

「え!?大丈夫だったのそれ!?!」

「はい、いつも私は事故に巻き込まれても、幸運なことに無傷でした……。でも、中にはそれが原因で亡くなる方も多くて。私は昔から親族やクラスメイトに、お前は疫病神だって言われて、避けられていたんです」

「……………」

「……だから、どんどん自分に自信がなくなっていくって……私がいなくなった方がみんなが幸せになるんじゃないかって、今まで何度も思っていました」

そんな……荒川さんにこんなに辛い過去があったなんて、知らなかった。

例え不幸な事故が起こったからって、その原因が彼女にあるはずがない。周りの人は捌け口にいるだけだ……。そんな事を言われて、落ち込まない方がおかしいだろう。

「……でも、先輩は、そんな私の噂を知ってても、分け隔てなく接してくれて……普通の後輩として扱ってくれました。……それがすごく、私にとっては嬉しかったです」

「当たり前だよ。荒川さんは他の人と何も変わらない、普通の女の子なんだから……」

幸運という才能があったって、荒川さんが一人の女の子だったことに変わりはない。一緒に過ごした期間はまだ短いけれど、彼女の素敵などところはたくさん知ってるし、もちろん疫病神なんかじゃない。

荒川さんは僕の言葉に嬉しそうに頷くと、少し穏やかな顔で話を続ける。

「私に近づくとみんなが不幸になるっていう噂があるから、周りの人

は近づいてくれないけれど……こむぎ先輩は、私のこと嫌ったりせず
に、むしろ私にたくさん声をかけてくれて、応援してくれた……」
そして、ぎゅっと拳を胸の前で握りしめて、にっこりと笑った。

「……だから私、先輩のおかげで、自分に少しだけ自信を持てるようにな
りました！」

その心からの笑顔を見て、胸を締め付けていたものがすつと軽くな
る。

「……よかった」

「それで、お礼を言いたいです。今まで私は、こんなに前向きになれ
たことなかったから……こむぎ先輩のお陰です。……本当に、ありがとう
ございます」

「ううん。それは僕の力じゃなくて、荒川さんが自分で、頑張ろうと
思ったからだよ」

「いえ……背中を押してくれたのは、先輩ですから。今度からは、最初か
ら私とは話してくれないって思い込むんじゃないかって、思い切つて自分
から話しかけてみようと思います」

「うん、すごくいいと思う……これからも応援してるから、頑張つて
ね」

「はい！」

元気よく頷くのを見て、僕もなんだかぼかぼかした、幸せな気持ち
になる。……人を幸せにするのは与えられた才能じゃなくて、荒川さん
自身が持っている力なんだろうなあ。

「……それと、1つお願いがあつて……」

しばらく談笑してから、荒川さんは遠慮がちに僕を見た。

「お願い？」

「仲のいい先輩と後輩は、スキンシップをたくさんするって聞いたん
です。私、こむぎ先輩ともっと仲良くなりたくて、それで何かやりた
くて……」

「スキンシップかあ……」

先輩と後輩のスキンシップって……とりあえず、そつと頭を撫でて

みる。

「…こんな感じかな？」

「……！」

さらさらとした髪を優しく撫でると、荒川さんが肩をびくつと震わせた。

「ご、ごめん！やっぱりダメだった…？」

「いつ、いえ、そうじゃないんです！ただ、ちよつとびっくりしちゃって……こんなに優しく撫でてもらったの、初めてだから…」

「…そつか」

「えへへ、ちよつと照れくさいけど、嬉しいです………！」

荒川さんは嬉しそうにはにかむ。彼女にはきつとこれから、もっと楽しいことがたくさん待ってるはずだ。まずは、この場を楽しまないで。

「次は腕相撲とかする？僕、重い植木鉢とか運ぶから、これは結構自信あるんだ」

「やってみたいです！えつと、て、手加減ありをお願いします…」

「あはは、わかったよ」

荒川さんが眠たくなるまで、ひとしきり2人遊びをして楽しんだ…。

スイートルームイベント：月詠澄輝編

♡ ♡ ♡

扉を開けるとそこにいたのは：月詠くんだった。

この部屋では、他のみんなは僕を相手に妄想をし始めるんだよな…。月詠くんは、僕を相手にどんな妄想をしているんだろう？

「……………」

「……………」

「(むぎ)ー」

「はっ、はい!？」

突然名前を呼ばれて素っ頓狂な声を上げてしまう。目の前の月詠くんは、腰に手を当てて険しい顔をしている…。

「こんな時間まで何してたの?おにーちゃん心配したんだからねっ、メールにも返信しないし、全く……………」

「ご、ごめんなさい……………」

気圧されて頭を下げる。いつもの優しい月詠くんとは違うけど、なんとというか、愛のある怒り方というか。

おにーちゃん……………もしかして、月詠くんが本物のお兄ちゃんってことか……………?

「うん、謝ればよし。それじゃあ今日も始めよっか」

そう言う月詠くんの手元には、数学のワークとノートが見えた。

「す、数学かあ……………」

「うーん…やつぱり、まだ苦手意識が抜けないみたいだねえ…」

顔を曇らせた僕に対して、月詠くんは小さくため息を吐く。

「1回公式を覚えちゃえば、後はそれを応用していけばいいだけだから。ね、お兄ちゃんと一緒に頑張ろう?」

「うん……………わかったよ」

それから、月詠くんにはばらくの間数学を教わることになった…。

「ここは、因数分解して…あれ……………」

「ああ、このもう一個の方の公式を使えばいいんだよ。こうすれば……ほら、やってみて」

「……ほんとだ！解けたよ！」

「すごいすごい！頑張ったねえ。こむぎはどんどん賢くなっちゃうなあ、お兄ちゃんも追いつかれないように勉強しないと」

「教え方がわかりやすい上に、僕が一問解く度にもものすごく褒めてくれる。彼はもしかしたら、”超高校級の家庭教師”とかにもなれるんじゃないだろうか……？」

「じゃあ今日はこのぐらいね。お疲れさま」

「こちらこそ。今日もありがとう」

「ふふ、かわいい弟のためならこのぐらい、安いものだよ」

月詠くんはそう言うてにこにここと微笑んでいる。本当に弟のことを大切に思ってるんだろうなあ。

勉強を終えた僕らは、何となくベッドの上に移動する。

それにしても、夢の中でさえお世話を焼いてもらうなんて……。

「…お兄ちゃんは、他の人のお世話をしてて疲れたりすることないの？」

「え？」

「人助けをしてたつて、必ず自分が恩返しされるとは限らないと思うから。そういうのがしんどくないのかなって……」

前から、僕達が彼に負担をかけてしまっていないか不安だった。見返りもないのにみんなのために動き続けるなんて、よほどの精神力がないと難しいだろう……。

「…そりゃあ、お兄ちゃんだってしんどいことだってあるよ。自分に出来ないことがあったら辛くなるし、自分の行動がその人にとって、余計なお世話なんじゃないかなって思っちゃうこともある……」

「……………」

自分一人で何でもやりたいと思う人や、助けを不快に思う人も中にはいるだろう。そう思うのは、当たり前前だ……。それなのにどうして、

人に手を伸ばせるんだろう…？

「でも、お兄ちゃんのお手伝いの原動力って、結局は誰かの笑顔を見たり、感謝されたりすることなんだ。ありがとう、って言われると心があつたかくなるでしょ？その気持ちって、お金とかよりもよっぽど価値のあるものだと思うんだ」

「だから、人助け、とは呼べないかな。きつとみんなにとっては、お節介に過ぎないと思うから…だめだねえ、お兄ちゃんは。欲張りなんだ、いっぱいみんなのためになることをして、いっぱいみんなの喜ぶ顔が見たい…」

「……………」

「喉から手が出るほどかわいい子達が、周りの環境や境遇のせいで素敵な笑顔を浮かべられなくなるのはあまりに残酷だよ。」

…僕は、誰もが笑顔で過ごせる環境を作ってあげたい。そのためなら何でもできるよ…さすがに、自分の命はお父さんとお母さんからもらった大切なものだから、投げ打つようなことをする訳にはいかないけど」

「……………」

「…………ごめんね！こんな自分の話ばかりしちやって、もうそろそろ寝る時間…………」

「お兄ちゃん！」

僕は彼をぎゅっと抱きしめた。

…理由は自分でも分からない。ただ、その夢を彼が1人で叶えるのは、あまりに大変すぎるような気がした。このままだと、いつか月詠くんが働きすぎて壊れてしまうんじゃないか、とか思ったりして。

こうしてくつつけば、僕にも少しは彼の辛さが分け合えるんじゃないかって、子供じみたことを思った。

「こむぎ、どうしたの…………大丈夫？どこか痛い…？」

「……………」

僕は静かに首を横に振る。でも、彼に何もうまく伝えることができ

ない…。

「……………」

月詠くんは黙ったままの僕を見つめて、

「ありがとう」

小さく呟くと、ゆつくりと僕の背中を叩いてくれた。泣きそうになった時にお母さんに抱きしめられたような、小さい頃の感覚が蘇る。

なんだかすごく、安心する。その体勢のまましばらくすると、丁寧にベッドに寝かせられ、ふかふかとした布団が上からかけられる。

そして、とん、とん、と規則的な音が肩に優しく響く。彼が歌う優しい声の子守唄は、頭の中を丸ごと包み込んでいるみたいだ。その歌声に身を任せていると、だんだん瞼が重たくなっていく…。

「…おやすみ、（んむぎゃい）」

…結局、またお世話されちゃったなあ……………。

スイートルームイベント：照翠法典編 上

♡♡♡

扉を開けるとそこにいたのは：照翠くんだった。

この部屋では、他のみんなは僕を相手に妄想をし始めるんだよな…。照翠くんは、僕を相手にどんな妄想をしているんだろう？

「よう。2周目か？」

音を立てないようにそつと扉を閉めると、ベッドの上に足を組んで腰掛けていた照翠くんと目が合った。

「2周目…？」

「この計上は此方の話…いや貴様自身の話だな、コレは」

「……………」

…僕は何を2周しているんだろう。この状況が照翠くんの言う”2周目”だとしたら、どうして僕には1周目の記憶がないのか。

「えつと、ごめん、何を言ってるのか全然分かんないや…」

「ああ、分かっている。貴様は適当な所に座っている。…さて、紅茶でも淹れるか」

「……………あ、ありがとう…」

部屋の中央へ行きベッドに腰掛けると、横に置いてあった小さな真つ黒いぬいぐるみと目が合った。

「……………」

心なしか、照翠くんに似てる気がするな…。照翠くんがいる所にこんな物が置いてあるなんて、ちよつと意外だ。慎重にぬいぐるみの頭に手を伸ばすと、もふもふしていても触り心地がいい。

「ダーズリンだ。砂糖やミルクは要らないだろ。そのまま飲め」

「う、うんー！」

ぬいぐるみをぺたぺたと触っていると、ティーカップを2つ持った照翠くんが、音もなく僕の正面に立っていた。全然気づかなかつた：慌てて紅茶を受け取る。

「おいしい……ダーズリンティーって、世界三大銘茶の1つだけ……
確かに、ストレートが飲むのが1番いい飲み方って見たかもなあ」

「良く知っているな。調べたのか？」

「ちよつとだけ、茶葉の栽培とかにも興味があつて。えへへ、紅茶のこと知つてるとなんとなく高貴つていうか、かつこいい感じがするしさ……」

「そうか。では後学の為に教えてやるが、紅茶とは別に高貴な飲み物では無い。」

……初期のヨーロッパ貴族がティータイムに飲んでいたのは、中国人が売りつけた質の低い烏龍茶。ヨーロッパでのアフタヌーンティーの文化が広がったのは17世紀以降だが、イギリスでの紅茶の消費量が生産地である中国からの量より遥かに多かつた。何故だと思ふ？」
「うーん、なんでだろう……」

「……答えるのが遅い。ヨーロッパ全土で紅茶の割増がなされていたからだ。麦藁に草、灰……時には家畜の糞まで加えられていたそうだが、はは」

「そうなんだ……なんか、イメージと違うなあ……」

「ああ。その混合物を庶民から貴族まで飲んで、紅茶の人气が爆発した、という経緯だ」

そう言つて優雅に足を組む照翠くんのカップの中身は、ブラックのコーヒーが入っていた。

「……………」

こういうところもあるけど……照翠くんって案外話せる人なのかもしれないな……。

「さて。結局貴様と僕は1度も話さなかつたな」

「……え？」

紅茶を飲み終えて立ち上がり、片付けをしていると、照翠くんが口を開いた。

「いい加減思い出せ。私をいつまでも待たせるな」

「? えつと……」

「僕達」に何をされたのか。貴様の脳天には確かに刻まれている筈だぞ」

「…あ、」

その瞬間、僕の脳裏の奥にあった氷河が一瞬で崩れ落ちた後、記憶が洪水のように流れ出してきた。

「……………」

全て、覚えている。きつかりと、記憶に刻まれている。”ICチップに”、刻み込まれている。

「う、……ああ……………」

あの時も、この時も。

目の前にいる彼がどうなったのかも。誰になったのかも。全部思い出した。こんな大切なことを、どうして忘れていたんだろう。

…2周目の僕、だからなのか？

「目の前の僕が、貴様にはどう映る？憎くて仕方が無い敵か？それとも、得体の知れない、血も涙もない化け物か？既に目の前で血は流してやったが」

「……君のやったことは、許されることじゃないと思う」

声が震える。自分を奮い立たすように、拳をぎゅっと握りしめる。

「ほう。何故だ？」

「あ、あんな事…許される訳ないよ……ずっと”彼”を利用して、みんなを裏切って……」

「……………」

照翠くんは黙ったまま、静かに僕を見つめる。僕は恐る恐る言葉を続ける。

「どうしてあんなことしたの？君にも彼女みたいに、何か動機があったんじゃない……」

「あの女と同じようなトラウマとなる記憶は僕には無い。逆に、どん

な設定があつたか…覚えているか？」

「…あの日記…」

古びたノートに書かれていた。天賦の才能。幼い頃の家庭崩壊。でも、あれをやったのは……

「そうだ。むしろ僕はトラウマとなる記憶を数名に与えた側らしいぞ、はは。更生プログラムじゃなかったのか？」

「……………」

「貴様も思った筈だ。オリジナル体より先にコイツが更生すべきだと。僕の言い分も聞かずに失礼だぞ貴様。僕は貴様にあのコロシアイ生活中に何かしたか？」

「……………」

「…まあ一方的な視点で書かれたアレをあの解釈のまま読めば凡骨ならそうなるか。」

「どういうことだ…？あの日記には、何か別の解釈があるってことか？いや、そもそも、何か理由があるにしたって…」

「それでも、月詠くんに入れ替わって過ごすなんて…あまりに酷いよ。頭のいい照翠くんなら、何か他の方法を思い付いてたんじゃないの？それなのにどうして…」

「それは僕が、あの女に人質を取られている内通者だったからだ。あの女にそうしろ、と言われたからだ。」

条件としてはあの男と何一つ変わらないぞ。僕だけを悪いと言い切れるか？彼奴が人質を取られたからと言った時、貴様は今と同じ様に奴を責めていたか？」

「……………」

責めていない。あの時は人質を取られているならしょうがない、と思つた。だったら、目の前の彼にも全く同じ理屈が通用するのか。人質を取られていたから、内通者だったから、何をしていいのか。

…照翠くんはあのコロシアイの中で、直接自分の手は染めていないし、学園のルールにも従っていた。僕が彼を責め立てることができない理由がない。

なのに、どうしてこんなにもやもやするんだ…。

僕は求められているんだ。家族でも友人でもない、”内通者”としての照翠くんと対話を。この部屋で、彼を満足させられる答えを…。

スイートルームイベント：照翠法典編 下



「……………」

「…はあ。埒が明かないな」

黙り込んでいる僕を横目に、照翠くんは呆れたように深いため息をつく。実際、呆れているんだろう…僕に彼を満足させることなんて、できるんだろうか。

「本来は僕がこんな事をする義理は無いが…凡骨にも解るように今回の論点を整理してやる」

「…うん」

「何故あの女は内通者に僕を選んだのか。僕はあの女とは正反対の環境…動機に対して共感などしない。善人ならまだしも、僕に対しては情けも求めるだけ無駄だな。…さて、何故だと思う？解答は3回迄。」

「なぜ、って…………」

妄崎さんが、照翠くんを内通者として雇った理由。言われてみれば、あの時は確かに最後まで分からなかった。

「うーん…何だろう、君を敵に回したくなかった、とか…………」

「契約を結ばない限り、僕は誰の元にも与する気は無い。それに加えて、能力としては弁護士よりも探偵助手の方が敵に回したくはないと思うぞ。理由としては弱いな…あと2回」

今のもカウントされちゃうんだ…。答えられるチャンスはあと2回だけだ、ちゃんと考えないと。

さつき言ってた、契約を結ばない限り、って言葉…つまり裏を返せば、照翠くんは契約を結べば、絶対に裏切らない。そういうことなんじゃないか…？

「君と契約を結べば、裏切る心配はない。だから彼女は内通者として雇う気になったんじゃないかな…」

「…予想通りの解答だな。確かに、僕は契約相手には絶対的に忠実：だが、あの女は僕の事すら信用はしていなかった。優秀な手駒だとは思っていたらしいが、完璧に信用している訳では無かっただろうな」

「人質を取っても動じない相手と、人質を取って動揺し自分に従順になる相手…貴様だったら何方を選ぶ。忠実なのは何も僕に限った話では無い。それを承知した上でわざわざ僕を選ぶには、それなりの利点が無いと説明は付かない筈だ。あと1回」

これもダメなのか…。なにか手がかりがないか、必死に頭を回転させる。

照翠くんを選ぶメリット…きつと、あのコロシアイが始まるより前に、2人は契約を結んだはずだ。

「……………」

コロシアイが始まる前は、みんな同じ場所で同じように生活していた…だけど例えば、照翠くんにだけ何かしらのアドバンテージがあったとしたら…？

更生されるのは彼の方だ、と思わず僕が考えてしまうような照翠くんの過去。

それは元から、実験を行った研究者側から、彼が何か特別なものを与えられていたからじゃないのか…？

照翠くんが、あらかじめ他の人達…ただ実験体になっていた僕達より有利な立場に置かれていたとしたら。もし、僕達や、この場所に関する秘密を知っていたとしたら。そういう役割についていたのなら。…それはきつと、黒幕にとって、彼を選ぶ理由になり得る。

「妄崎さんが、君を選んだ理由は…君が元々、あの更生プログラムの中で内通者のポジションにいたからだ」

僕は、照翠くんの目をまっすぐに見据える。

「……………」

「研究者の人たちは、君に僕達の情報を既にある程度教えて、内通者と

してここで生活させていた。君は最初から、このプログラムの対象として見られてなかった…だから、家庭を崩壊させるようなことを起こしても、向こうから黙認された。違うかな」

「…成程。それが貴様の解答だな」

照翠くんは、ゆったりとした動きで指を合わせた。

「…そう。僕は元々内通者として、このプログラム内で生活していた。まあ、殆どの機密情報は僕には秘匿されていたが。…プログラム本部との契約、とでも言えば解りやすいか？」

「そんな時に、あの女が声をかけてきた。どこで噂を聞き付けてきたのかは僕の知る所では無い。ただ、自分の計画に協力しろと言われた…知人があつさり與人質に取られている映像を見せられながらな

「人質の人間にさして思い入れも無かったが、断れば僕自身の身も危ない。それで契約を結んだ。後は貴様の知る通りだ

「…さて。此処まで知って、貴様の僕への印象は変わったか？」

「……………」

正直、照翠くんのごことは相変わらずよく分からない。けれど…

「…僕は、内通者としての君じゃなくて、本当の、照翠くんと向き合いたいって思ったよ。他の人みたいに君の立場とか、性格を利用するんじゃないくて、強くて、頭が良くてかっこいい照翠くんを頼りたい」

さつき彼のことを思い出した時には、なんとなく気が引けるような感じがあった。彼のことを怖いとも思った。

でも、こうして話してみると…照翠くんは、根っからの悪い人のようには思えない。きっと、本当の彼は……

「……………はあ。」

「……………え？」

照翠くんの大きなため息が僕の思考を遮った。

「解答を出した所までは悪くなかったが…結論がそれか」

「え、ええつと……」

照翠くんは突然すつと立ち上がって、カツカツとハイヒールの音を鳴らしながら扉へと向かっていく。

「…」次に” 此処で会う時にはもつとマシな締めを用意しろ。出直してこい三流。」

そう言い残すと、彼は振り返らないで部屋を出ていった。ヒールの音とその反響音が徐々に遠ざかっていく。

…最後の彼の表情は、なぜかいつもより、不機嫌そうには見えなかった。

「…………いや、見間違いかなあ…」

スイートルームイベント：掃気喪恋編

♡♡♡

扉を開けるとそこにいたのは：掃気さんだった。

この部屋では、他のみんなは僕を相手に妄想をし始めるんだよな…。掃気さんは、僕を相手にどんな妄想をしているんだろう？

「おにいちゃん…大丈夫…？」

掃気さんは部屋に入ってきた僕に、心配そうに声をかけてきた。

「…………？」

「この前…来る時に、おおかみに襲われそうになった、って言った、から…」

「お、オオカミ？」

僕が思わず聞き返すと、掃気さんはこくりと頷く。

「森の奥に来るまでに、あぶないところがたくさんあるって…おにいちゃん、前に言ってた…」

「…そ、そうだね。森には怖い動物も多いからね」

とりあえず話を合わせる。どうやら、この場所は森の奥…ってことになってるのかな。

「でも…ここはあんぜんだから…もう、大丈夫…」

掃気さんがそう言っ僕の手をきゅつと掴んで、ベッドの方へ連れていく。されるがまま、彼女について行くと、ベッドの縁に二人で腰掛けた。ぽすん、という音と共に、僕らが座ったところが沈み込む。

「…きょうも来てくれて、ありがとう…」

「…うん、どういたしまして」

「もこ、ずっと一人でこのお城にいるから…毎日会えるのはおにいちゃんだけなの。だから、おにいちゃんがいてくれて、うれしい…」
「そっか、そう言ってもらえてよかったよ」

一人でお城に住んでいる…掃気さんはお姫様とかなのかな。でもどうして僕は毎日掃気さんの元へ行ってるんだろう。

…ま、まさかとは思うけど、僕が婚約者、とか…………？

「…おにいちゃん、顔赤い…どうしたの…？」

「な、なんでもないよ！全然！」

「なにかあるなら、なんでも言つて…だって…おにいちゃんは…」
「……………」

掃気さんの心配そうな顔が、気づかないうちにかなり近くにまで来ていてドキツとする。

こんな距離が近いなんて、やっぱりそうなのか…!?

「おにいちゃんは…もこの…おにいちゃんでしょ…？」

「……………」

な、なんだ…兄妹つてことか…。

さつきと比べても、今日の中で一番顔が熱くなっていることがわかる。まったく、僕は何て勘違いを…。

「……………」

掃気さんが、すつと僕の額に小さな手を当てる。ひんやりとしていて気持ちいい。

「やっぱり…熱…？」

「い、いや、違うと思う！ちよつといろいろあつて…とにかく、僕は大丈夫だから！」

これ以上彼女に近づかれると、果てしなく体温が上がる気がしたので、僕は慌てて距離を取った。

「…そう…それなら、よかつた…おにいちゃんが風邪ひいたら…もこ、心配だから…」

「ありがとう。でも、ほんとに大したことじゃないから。心配しないでね」

「…うん」

その後はお互いなんとなく黙り込んで、ベッドにつかない掃気さんの足が宙をぶらぶらしていたり、僕の行き場のない手が自然と髪の毛をいじったりしていた。

そんな普通の人だと気まぎれな沈黙が、彼女と一

緒だと意外に心地いい。

「…あのね」

しばらくして、掃気さんが小さく口を開いた。

「…どうしたの？」

「もこ…ずっと前から考えてたの…」

ぽつり、と掃気さんがつぶやく。僕は話に集中しようと、静かに座り直す。

「もこは、このお城を出て…そとの街で、1人で暮らしたい」
「……………」

「今までは、そとはあぶないから…このお城でずっと過ごせばいいって…思ってた。みんなも、おひめさまはそうした方がいいって、言ってたから……」

掃気さんは伏し目がちになり、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「…でも…おにいちゃんから、そとの話を教えてもらいうちに…そとの街で…自分のちからだけで、暮らしてみたいって思ったの」
「確かに、喪恋の言うことはわかるけど…お姫様がそんなことをしたら、みんな心配するんじゃないかな…」

掃気さんがお姫様なら、もし一人暮らしをするなんてことになったら、きつと家来の人達が心配するだろう。

それに、一人暮らしは家事洗濯とか、大変なこともたくさんある。掃気さん1人では厳しいんじゃないだろうか…。

「例えば、外に出るとしても、僕と一緒に暮らす…とかじゃだめかな。家事とかも分担してできるし、何かあった時には助けになれるし」
「……………」

掃気さんは膝の上で拳をぎゅっと握った。そして一呼吸置いたあと、僕の目を見つめて言った。

「…おにいちゃん、もこ、もうこどもじゃないよ」
「!」

彼女の口から出た意外な言葉に、動きが固まる。

「もこはもう、おにいちゃんに守られてるだけじゃだめだって…思っ

たから……おにいちゃんが昼間、いない間に……お料理も、お洗濯も、い
ろんなこと……練習したの」

「……………」

「もこはひとりでも……大丈夫……。だから、おにいちゃん……明日そと
に、つれてって」

「……うん。わかったよ」

掃気さんのしつかりとした眼差しを見て、きつと彼女は大丈夫だろ
うと確信した。1人でお城で静かに過ごしていた頃とは違って、今の
掃気さんなら、困難もきつと乗り越えられる力があるはずだ。

「けど、危ないことがあったらすぐに言うんだよ。いつでも駆けつけ
るからね」

「……ありがとう……」

掃気さんが小指を出してきたのに、僕の小指を絡める。

「ゆびきり、げんまん……えつと、針千本はいたいから……。嘘ついた
ら、もこにくまさんのパンケーキ……つーくる……」

「あはは、わかったよ。とびつきり大きいくまさんを作るね」

「……ふふ……」

掃気さんが嬉しそうに微笑んだ。その笑顔はまるで、小さなかわい
らしい花が、ぱつと咲いたみたいだ。

「よし、初めての街に行くんだから、今日は早めに寝て明日に備えよう
か」

「……うん。あの、おにいちゃん……」

「ん？」

掃気さんがもぞもぞと恥ずかしそうに体を動かす。

「他のことは、大丈夫だけど……ひとりで寝るのだけは、どうしても怖く
て……きょうだけでいいから、いっしょに、寝てくれる……?」

「……もちろん」

僕らの話し中ずっと静かにしていてくれたしよりしよりくんを真
ん中に挟んで、僕と掃気さんはお互いの温もりを感じながら、深い眠
りに落ちていった…。

スイートルームイベント：ステイヴン・J・ハリス 編

♡ ♡ ♡

扉を開けるとそこにいたのは…ステイヴンくんだった。

この部屋では、他のみんなは僕を相手に妄想をし始めるんだよな…。ステイヴンくんは、僕を相手にどんな妄想をしているんだろう？

「Good evening…来てくれてありがとう、こむぎ君」

僕が部屋の中に入ると、ステイヴンくんは軽く手を振って言った。

「ううん、全然大丈夫だよ」

「急に呼び出したりしてすまない。どうしても、確かめたいことがあつてな。こんなこと誰かに話したことは無いんだが…親友の君にしたら、話せると思うんだ」

「…親友かあ……」

僕はステイヴンくんの親友という設定みたいだ。思わず呟くと、ステイヴンくんは途端に不安そうな顔をした。

「僕はそう思っていたんだが…ち、違ったか…?」

「いや、そんなことないよ!ごめんね、ちよつと親友って言われたのが、その、嬉しくて…」

「そうか…なら良かった。それで、話がしたいんだ。少し長くなるかもしれないが、聞いてもらっていいかな」

「うん、もちろん。親友なんだからなんでも聞くよ」

「Thanks…立ち話もなんだから、とマシューが言っているし、このベッドの上にも座ろうか」

僕は2人でベッドの上に腰かけた。前から思ってたけど、マシューさんっていうのは気遣いができるすごく優しい人なんだろうな…。

ステイヴンくんが少し緊張した面持ちで話し始める。

「Well!…ジョークもない身の上話だから、こむぎ君にとってはつまらないかもしれないが。」

…僕達…いや、”俺”は昔から、人と仲良くするのが苦手だったんだ。周りの人のことをあまり、信じることができなかった」

「…うん」

「表向きでは仲良くできていても、本当は相手が自分のことをどう思っているのかわからないだろう。それに、そんなことを考えてしまう弱い俺は…何か些細なことがきっかけで、周りの人に軽蔑されたり嫌われてしまうかもしれない。」

そんな風になると、どうしても他人を信頼することができなくて…」

苦しそうな表情で話していたステイヴンくんは、そこで一旦言葉を止める。

「俺にとって…ジョン、メアリー、ジャック、マシユ…頭の中に住むたくさんの人格たちだけが、信頼出来る友人だった。彼らの他に、心の底から信じられる他人は、1人としていなかったんだ」

「……………」

ステイヴンくんがそんな思いを抱えていたなんて、今まで全く知らなかった。友達や周りの人を信じられないということは、きつと普通に生きている僕には想像もつかないような、とても苦しいことなんだろうと思う。

彼の顔を見ると、ステイヴンくんは少し困ったように眉を下げ、小さく笑った。

「君に変な奴だと…弱い奴だと思われても仕方がない。ただ、これだけは伝えさせて欲しいんだ」

「…うん」

「君の真っ直ぐな人柄に、無邪気な笑顔に…俺を親友だと言ってくれたことに、救われた。俺は初めて、本当の意味で、他の誰かを信じられるんじゃないか…そう思ったんだ」

ステイヴンくんは、真剣な眼差しで僕を見据える。

「俺は…君を信じたい。」

「……………」

「君の気持ちを確かめたいんだ、こむぎ君。君は今も、これからも…俺の事を『親友』だと呼んでくれるか？俺は君を…信頼しても、良いんだろうか？」

「…いいよ。全部良い。僕は君のヒーローみたいにかっこいいところも、君が弱いと思っている部分も…親友として、君の全てを受け止めたい」

「……………」

「なんでもできる完璧な人なんて、この世にいるはずないよ。誰にでも弱い部分はあるし、不安に囚われちゃうこともある。」

でもそういう時こそ、他人を…僕を、頼って欲しい。そうやって互いに支え合ってこそ、親友って呼べるんじゃないかな」

「……………そうだな。ありがとう、こむぎ君」

孤軍奮闘するヒーローは確かにとてもかっこいいけれど、お互いに信頼して背中を預け合えるバディのような親友。最初はそれでもいいんじゃないだろうか。

世界を救うヒーローだって、生まれた時から完璧な超人って訳じゃないだろう。

「…H A H A, やっぱりシリアスな雰囲気には慣れないな！」

ステイヴンくんは誤魔化すように、照れくさそうに頬を赤くして笑った。

「君の言葉が聞けてとても嬉しかったよ。俺と親友でいてくれて、ありがとう」

彼はそう言って立ち上がると…突然、強く抱きしめてきた。

そう言えばアメリカの映画って、親友がよくハグをするシーンみたいなものがあるような。やっぱりステイヴンくんは、根っからのアメリカ人なんだな…ちよつぴり恥ずかしいけど、嬉しいな。

「こんな俺だが…これからもよろしく頼む、こむぎ君。」

「うん、こちらこそ。ステイヴンくん」

その夜は、2人でアメリカと日本の文化について熱く語り合った
…。

スイートルームイベント：切ヶ谷小町編

♡♡♡

扉を開けるとそこにいたのは：切ヶ谷さんだった。

この部屋では、他のみんなは僕を相手に妄想をし始めるんだよね。切ヶ谷さんは、僕を相手にどんな妄想をしているんだろう？

「やあ！こうして2人きりで会うのも久しぶりだねー」

「う、うん！久しぶり」

切ヶ谷さんはいつものように気さくに挨拶をしてくる。僕もそれに応じて、ぎこちなくベッドの上に登り、彼女の隣に座る。

「見て、これ。すつごく柔らかいんだよ！こむぎも触ってみなよ」

切ヶ谷さんはそう言つて、両腕で抱えていた「YES」と書かれたクッションを僕に投げて渡してきた。

「わっ、：ほんとだ、ふわふわだね」

僕は慌てて受け止めて、しばしその感触を楽しんでから切ヶ谷さんにクッションを返した。

「だよね！ボク、そういう触り心地の枕が欲しいなあ…こむぎはどう？」

「そうだね…でもこんなに気持ちいい枕だったら、ぐっすり寝すぎて寝坊しちやいそうだよ」

「あはは！そうかもじゃないね！」

…さつきから、こむぎつて呼ばれてるよな……。

顔が赤くなつていくのが切ヶ谷さんにバレていないように願いつつ、彼女の楽しそうな、明るい笑顔を見つめる。

「……かわいいなあ……」

「……え？」

「あ……」

思わず口に出してしまっていたみたいだ。切ヶ谷さんがきよとんとした顔をする。

「……何がかわいいの？」

「それは……こ、小町しかいないよ……」
「……………」

切ヶ谷さんが俯いて黙り込む。何か気に障ってしまったんだろうか。

薙刀は戦闘系の才能なんだし、やっぱりかわいいよりもかつこい
いって言われたいのかな…？

「不意打ちで、そういうの…ずるいよ。」

予想に反して、顔を上げた切ヶ谷さんの膨れた頬は、真っ赤なりんごみたいだった。今まで見たことのない表情に、心臓がドキンと跳ね上がる。

「…こむぎはボクのこと、いつも可愛いって言ってくれるよね」

「……………うん」

「ボク、それが嬉しいんだ…いっつも、女子力がないとか、動物みたいとか言われるし。」

薙刀の試合なんかでかつこい男の人と戦っても、あくまで向こうは戦闘相手としてしか、ボクを見てないんだ。でも、キミは違った」
「……………」

「ボクのことを可愛い、好きだって真剣に言ってくれるのは、キミが初めてだ。だから、ほんとに心から嬉しいよ。ありがとう」

「お礼を言われることじゃないよ。僕は、その…自分の正直な気持ち
を言ってるだけだから……………」

そう言っているうちにまた顔が熱くなってくる。切ヶ谷さんの恋人の僕は、そんなに恥ずかしいことをたくさん言っているのか…!?
「あのさ、あとちよつとだけボクの話聞いてもらってもいいかな」
「もちろん。いくらでも聞くよ」

「ありがとう…ボクは昔から、凰玄…いとこや友達に、『小町が笑っているのを見るとこっちまで元気になる』って、言われてたんだ。」

それでいつも笑っておどけて、落ち込んでたり、元気がないみんなを元気づけたいと思うようになった。…そうやってみんなが笑顔になつてくれるのを見るのがボクにとっては、すごい、幸せだったんだ」

切ヶ谷さんは、ふわふわのクッションに顔を埋める。ぽすん、とY ESの文字が沈む、小さな音がした。

「だけどほんとは…ボクは、いつだって元気な訳じゃない。女っ気がないって、大会の会場なんかで他の高校の選手にバカにされるようにからわれて、影でこっそり泣いた時もあった。稽古で負けて死ぬほど悔しくて、自暴自棄になりそうな時もあった」

ぱつと顔を上げた彼女は、また見たことのない表情をしていた。少し泣きそうな、それでいて、少し笑っていて。

「そんな時に、こむぎがボクに告白してきたんだ…覚えてる？あの時のこと。ボクは嬉しくって、思わず泣いちゃったんだ。キミはずっとおろおろしてて、ちよつと申し訳なかったんだけどさ」

「あはは…こつちこそ、なんかごめんね」

「ううん、嬉しかったよ。ボクを ” 薙刀士の切ヶ谷小町 ” じゃなく、” 切ヶ谷小町 ” っていう、一人の女の子として見てくれてて。…何度も言うけど、そんなこと、初めてだったからさ。どうしていいかわからなかったんだ」

「…うん」

「今は、少し分かるようになってきたかも。キミの前では笑顔だけじゃなくて…いろんな表情を見せてみたい。

落ち込んだ時は慰めてもらいたいし、泣いた時はそつと側にいてほしい。キミになら、情けないところも見せられる気がするんだ」

「…僕も、小町の悩みや悲しいことがあったら、それに寄り添いたいって思う。」

2人なら、辛いことは二等分になって、幸せなことは二倍になるって聞いたことがあるよ。僕に何ができるかはわからないけど…」

「キミは自分が思ってるよりも、ずっとすごいよ。一緒にいたからこそ、ボクにはわかる。」

キミはこれから成長できる、ポテンシャルを秘めてる…ボクにできることなら、キミにだってできるはずさ」

切ヶ谷さんは、僕と向き合うような姿勢になって、僕の手を掴んでぎゅつと握りしめた。彼女の温かさが伝わってくる。

にっこりと、花が開いたように笑った切ヶ谷さんは、とてもかわいらしくて、愛らしい。そのままゆっくりと瞼を閉じて、僕の額にこつんと額を突き合わせる。

「だから、これからは……むぎが”ワタシ”を笑顔にしてね。」